

「河鍋暁斎 —その手に描けぬものなし」展

サントリー美術館（六本木） 2019.02.06～03.31



「河鍋暁斎」(1831~89)は、幼少時の7歳で人気浮世絵師「歌川国芳」のもとで絵を学び、その後「狩野派」に入門し、日々の修練と精神に支えられて、戯画、仏、仙人、花鳥などを題材に、水墨によるメリハリがある線などの「狩野派」の筆法を徹底的に学んで、18歳時の作品《毘沙門天像》で高い技術を示している。

本展は、狩野派・浮世絵・日中の古典を学ぶものとして、画鬼、奇抜、端正を取り上げて、「その手に描けぬものなし」とのタイトルで展示されている。

今回、強調されるのは狩野派絵師としての「暁斎」の姿で、《虎絵》《閻魔・奪衣婆図（えんま・だつえばず）の背景》、《枯木寒鴉図（こぼくかんあず）》（上図右端）などの水墨の力強い筆法は「狩野派」の影響が強い作品とされている。

今回の展示作品の構成は、1. 暁斎、ここにあり！。2. 狩野派絵師として。3. 古画に学ぶ。4. 戯れを描く、戯れに描く。5. 聖俗/美醜の境界線。6. 祝玉の名品。7. 暁斎をめぐるネットワークからなる。



《虎図》 19世紀



《閻魔・奪衣婆図》 1879~89年
3月06日~31日の展示